“元気”その3

札幌市医師会　門脇　純一

昔の日本人の顔つきをみると、“元気”がみなぎっていたという。ところが、いまの人には、それが無い。しかも、大人も子どもも。何故だろう？開発途上国の子どもをテレビで見ると、目が輝き、明るい表情で、わが国の子どもと対象的である。経済的背景の違いからこの顔の表情の違いを説明するとどうなるか、ふと戸惑ってしまう。

顔の表情は心の鏡だとすると、生活、将来への不安に対しての陰りが、このような像として見えているのであろうか。まさか、経済上の高低がこうさせているとは言えないでしょう。金銭に恵まれても、必ずしも心には、何か充足されてないものが存在していると考えるのは、どうだろうか。

最近の高校生の国際調査で、日本の高校生は、自分の人生、将来に夢・希望を持つ比率が最低と報告されている。寂しい。

札幌「元気基金」というのが、あるそうだ。短期資金の融資制度で、利用は順調であるとのこと。日本医師会では、「からだ元気科」というテレビ番組を全国放送しており、先日の番組では会長の植松治雄氏が、地域医療が一丸となって取り組むチーム医療を強調している。日医ニュースのオピニオン欄に、玄侑宗久氏は病気もうつるが、元気もうつる。元気な医師の会話こそが、病気に最も効くと述べており、検査に頼りがちな医師の姿に忠告を発しているように聞こえる。

札幌市長の上田文雄氏は「札幌元気ビジョン」を掲げ、元気になる街の取組、元気の源は何よりも健康をあげ、安心して、この街で生活できる体制作りを挙げている（札医通信220号）。

この頃は長らく低迷していた経済を元気づけ、心に活をいれる表現が新聞、テレビなどで多く見聞される。

不景気については、一部責任のある行政者も、勤勉で優秀な日本国民を持ち上げ、喪失しかけた自信の回復に刺激を与えている。精神論で人を変え、動かすことは、かつてほど容易でなくなっている世相にみえるが。

専門部から

人口動態職業・産業調査へのご協力のお願い
—出生、死亡証明書等を「職業・産業例示表」とともに交付してください—

◇医療政策部◇

今年は国勢調査の実施年にあたり、厚生労働省では平成17年4月から平成18年3月まで「平成17年度人口動態職業・産業調査」を実施します。

届出には、各医療機関で発行する出生証明書等の添付が必要であり、出生・死亡および死産の届出書を直接医療機関から受け取る方が多いと思われることから、厚生労働省から日本医師会を通じて医療機関における協力方の依頼がありました。

「職業・産業例示表」は所管の保健所から各医療機関に配布されますので、届出書とともに配付していただきますよう、ご協力をお願いいたします。